高知県自然観察指導員連絡会会報

ネイチャー高知

No 28　2007 年 1 月 20 日発行

観察会の報告　浦戸湾の干潟や磯の生き物観察会

日　時　2006 年 9 月 9 日（土）　12 時 30 分～14 時
場　所　浦戸湾 衣ケ島海岸（高知市横浜）
参加者　13 人（大人５人，子ども８人）

雨が降ったり止んだりの天候にもかかわらず，13 人の方に参加いただいた．海の観察会にしては，大変多い人数と言える．

観察のテーマは「内湾の潮間帯で，生き物がどんな場所に，どんなふうにすんでいるか」とし，貝類とカニを中心に観察した．

初めの説明のとき，「カニの歩き方を見てみよう．カニはどんなふうに歩くでしょうか」と言うと，小学 2 年生が「カニは横に歩くに決まっている．前に歩くカニは絶対おらん」と力説してくれた．

仁井田神社前の干潟に降りると，すぐにカニを追いかける子，「晩飯，晩飯」と言いながらアサリを掘る幼児，と思い思いに観察をした．「説明で，フナムシのことが抜けちょったで」と指摘してくれる子もいた．アサリは，生きたものがほとんどいなかったが，ソトオリガイは多かった．干潟の表面にはカノコガイがたくさん這っていた．ヤマトオサガニは群生し，マメコブシガニも何個体か見つかった．

マメコブシガニの歩き方に注目してもらったら，すぐに「前に歩きゆう！　すごい！」という反応があった．このカニをうまく観察会のスターにすることができた．でも，実は日本産のカニで横に歩くものは，半数を少し超えるくらいの種数だとのことである．身近で目にするカニは，どれも横歩きをするので，「カニの横歩き」と思い込んでいるだけのようだ．

コンクリート岸壁には，上部にシロスジフジツボが付着し，下部に帰化種のコウロエンカワヒバリガイ（下図）がおびただしく付着しているようすを観察した．干潟で跳ねていた尾のついたカエル（ウシガエルの幼体？），穴に隠れたノコギリガザミなどなど，それぞれに印象深い生き物に出会うことができたようだ．

雷が鳴り始めたので，予定より早く解散した．

参加してくれた小学生は，いずれも海や川の生き物が大好きなようすで，心強く思った観察会だった。

三本　健二

わたしのフィールドノート その５

王様からのメール

田城　光子

もう十年以上も前のこと。娘がひとりで留守番をしていると、日本語のとても上手な髭をはやしたへんな外国人がやってきて、「お父さん､お母さんによろしく」と、包みを置いていったと言う。開いてみると中にはぐい飲みのセットとカードが入っていて、それはシマムタ共遊国国王の結婚の記念品と挨拶状であることがわかった。

シマムタ共遊国は、四万十川中流域の旧西土佐村口屋内にある。赤い鉄橋を渡って右岸の、イワカンスゲやスダレギボウシが岩にはりつくように咲く崖っぷちに小さなお城が建っていて、四万十川を見下ろしている。王様はいつもこの城で、小さな石を磨いたり星を眺めて暮らしている。たまに入り口に『只今国王は外遊中帰国は夕方』などという札がぶらさがることもある。

その王様から、ある日こんなメールが届いた。

川原でこんなものを見つけました。名前を教えてください。

メールには写真が 2 枚添付されていた。訪れるお客様の首飾りにするための小石を拾っていて見つけられたのだろう。1 枚はハマゴウ、もう 1 枚はヨメナに似たキク科の花の写真であった。

ハマゴウはクマツヅラ科の落葉小低木で、海岸や大きな河川の河口の砂地に匍匐して群生する。茎は砂に埋もれ枝はたち上がって、夏、枝先に淡い青紫色の花を咲かせる。全体に良い香りがあり、特に果実を枕にすると安眠効果があるとして利用されてきた。海岸には普通に見られる樹木だが、河口から 20 キロメートルくらい上流の口屋内に生えているのには驚いた。一方のキク科は、写真だけでは同定は難しい。いずれお伺いして実物を見てお答えします、と返信させていただいた。

しばらくして、お正月も過ぎた頃。お妃さまたちが街道沿いで旅人をもてなしている、小さなキッチンがある。そのご馳走がいただきたくなって出かけた。四万十川の水量はグンと減っていて、一面広い川原になっており、王様の指差す方向にハマゴウが見え、そこまで歩いていけると言う。昨年の台風１４号による大洪水で、ヤナギの木が根こそぎ倒れていた。ところどころにツルヨシの群生があり、トダシバのようなイネ科も立ち枯れている。なにやら獣の糞もころがっていた。川の流れは大きくふたつに別れ、その真ん中の広い川原の南端近くに、ただ一株だけと思われるハマゴウが、１０メートル以上もの長い茎を何本も出して、たくさんの石ころを抱え込んでいた。石ころの間から､長い冠毛を出した、ノコンギクと思えるキク科植物が見られたが、メールで送られてきたのはこのキクではなく、少しはなれたところに生えている葉が細いほうだった、と言われる。こちらもすでに枯れていたが、わずかに残った果実を採り冠毛の長さを測ってみると、ノコンギクより１ミリほど短かった。雰囲気としてはホソバコンギクのようだった。渓流沿いに生える植物は、普段は水につからないが、いったん洪水がおきると水が引くまで流れの中で耐え続けなければならない。水の抵抗をちょっとでも少なくするために葉が流線型になるのだという。ホソバコンギクもそんな環境に生える植物のひとつだ。王様の気になるキクも、暴れ河の異名をもつ四万十川に対応したもののように思える。しかし今は厳冬期。地上部はほとんど枯れている。如何せん、標本にはならない。花の時期が来るのを待って、再び調査に来ることにした。その時水かさが増しておれば、王様自らカヌーを漕ぎ出して採集してくださると、お約束なさった。

キクの名前はそれまでおあずけになるが、決して「いますぐ答えよ」などと、無理なことはおっしゃらない。その日まで王様は、やはり石を磨き星を眺めながら気長くまってくださる。心やさしい王様なのだ。その時にはまた、お妃さま手づくりの鹿肉のハンバーグをいただけると、いやしいわたしは食欲を募らせるのである。

わたしのフィールドノート　　その６

可　愛　い　花

田城　光子

植物の和名（動物でもそうだが）は、カタカナで表記する。そのために、読み間違えることはないが、意味が分らないことがある。ヘツカニガキもそのひとつだ。初めてこの木の名前を聞いた時から、ヘツカとはいったいなんだろうといつも思っていた。身近に見る木ではないので、名前のことを除けばあまり関心も持たなかった。ところが高知県レッドデータブックに、「絶滅危惧１Ｂ類」とあり中村市にも記録がある、とされている。旧大方町の山道で頭上に枝を伸ばした固体が確認されてから、これは真剣にさがさなければいけないと考えるようになった。

まず名前の由来を調べた。鹿児島県大隅半島辺塚で初めて採集されたことによる、と書かれている。あの響きのよくないヘツカとは、地名だったのだ。ニガキ科のニガキは、枝をかじると顔がゆがむくらい苦味がある。ヘツカニガキはアカネ科で、別名ハニガキと言うそうだ。漢字で書けば葉苦木だろうか。葉に苦味があるかどうか。まだかじったことは無い。同定は五感を使って、というのがわたしたちのチームの一致した考えであるから、ぜひ一度かじって味を実感しなければいけないと思っている。

秋も深まった頃、ヘツカニガキの下を通った。上品な黄色に染まった葉が、太陽を浴びて光っていた。翌年の春。こんどは展開したばかりの柔らかくて赤い葉が風に揺れていた。長くて赤い葉柄、すっきりした葉脈。白っぽい樹皮に大きな皮目がたくさんあることなど、特徴のはっきりしたかなり目立つ樹木であることが分った。昨年正月の３日。十和村から西土佐村方面へ、四万十川沿いを走りながら、ヘツカニガキの裸樹を数箇所で見つけた。海岸近くの常緑樹林内にあるものと思っていたら、四万十川の岸にたくさんかたまって生えていた。その後に見たものも、だいたい川の近くにあった。まだこの木に咲く花を一度も見たことがないので、今年こそは花を見て、標本を採集しようと目標をたてた。

ヘツカニガキの花は梅雨時に咲く。雨の時期は家にこもりがちになるのだが、晴れ間を待って出かけた。四万十川ウルトラマラソンのコースを、ヘツカニガキの花を探してひた走る。やがて、遠目にもそれと分るほど樹冠がクリーム色に染まった木が見えた。車の中に「うわあ！」と言う歓声があがった。ちかずいてみると、真ん中から棍棒状の花柱を出した小さな筒状の花がたくさん集まって、まるでピンポン玉のような頭状花序を作っている。そのピンポン玉が枝先に 10 個ほど総状に付いて、どの枝も重たそうに見える。まさに鈴なりとはこんな状態のことを言うのだろう。一個の玉には約 160 個の筒状の花が咲いていた。あたり一面むせるような香りがして、イシガケチョウが花の蜜を吸っていた。初めてヘツカニガキの花を見た一同は、車から飛び出して「可愛い」を連発した。カギカズラも同じアカネ科でよく似た花をつけるが、あの硬い鉤で他物に絡みつき、一度絡まったら離れることを知らない執念深さがあるが、ヘツカニガキにはそれがない。植物調査に携わっている者たとえ端くれではあっても、可愛いなどという感想だけで終わらせてはあまりにも恥ずかしいのだが、どうも誰の口からも「可愛い」以外の言葉が出なかったように思う。大河四万十の流れを見下ろしながら、今を盛りと咲いたヘツカニガキに、みんな魂を抜き取られてしまったようであった。

昨年はその後もあちこちで、たくさんの花を咲かせたヘツカニガキを見た。花の咲いている期間は短く、ほぼ一週間で散ってしまった。タニワタリノキは１～２日で終わると言うが、ヘツカニガキの場合も花の命の短さから、見るタイミングを失しているのだろう。わたしたちはたいへん運が良かったのだ。

旧大方町から仏が森に至る山道のそばには２本の大木がある。花をつけた枝の位置が高く、三人がかりで幹に抱きついたり背伸びしたりいろいろ工夫しながら採集を試みたが、高枝きりが僅か 20 センチばかり不足して採集できず、いまだにこの固体は住民登録できないでいる。そして中村に記録があるというものは、まだ確認できていない。

野山での拾い物（ウスタビガ・ヤママユガの繭）

坂本　彰

野山を歩いていると、思わぬ拾い物に出会うことがあります。鳥の羽であったり獣の糞であったり、他人から見ると何の価値もない物の場合が多いですが、それを大事に持ち帰って色々調べてみるのもまた楽しいものです。今回そんな拾い物の中から「ウスタビガ」と「ヤママユガ」の繭を紹介します。

ウスタビガもヤママユガもヤママユガ科の昆虫で、大型の蛾です。

まず、ウスタビガの繭ですが、これは「ヤマカマス」とも呼ばれます。漢字で書くと「山叺」ですが、「叺（かます）」を知っている人は団塊の世代以前の人たちでしょう。私の家は農家でしたので、子どもころ籾を保存しておくのにこの叺を利用していたのを覚えています。筵（むしろ）を二つ折りにして作った袋ですが、昭和３０年代は、叺に限らずいろいろな道具の材料として稲藁が一般的に使われていました。私は農家でしたので、穀物の保存用に使われていたことしか知りませんが、それ以外にも、塩や石炭などを入れるためにも用いられたようです。ヤマカマスはその姿が叺に似ているところからつけられたものです。

話がそれてしまいましたが、このウスタビガの繭は２０年以上も前、大豊町馬瀬から明神岳を経由して国見山に登り、本山町の吉延に降りたときに、国見山の近くの若い雑木林で採取したものです。具体的な年月日を確認しようと、古い山行記録をめくってみましたが、明確になりませんでした。
当時は、もっと、薄緑色が美しかったですが、時の経過の中で少し色あせてしまいました。

次に、ヤママユガの繭ですが、これは昨年（２００６年）秋に安芸市へ墓掃除にいったとき、墓地の近くで見つけたものです。この時は、２個の繭を採取しました。ヤママユガはクヌギ、コナラ、カシワ、シラカシなどブナ科又はサクラなどバラ科の樹木の葉を食べるそうです。採取した時、何の木の枝にあったかきちんと記録しておくべきでしたが、残念なことに出来ていません。記憶も曖昧です。そこには、クヌギ、カシワ、サクラはありませんし、この時採取したもう一つの繭にはその食草である植物の葉が２枚くっついていますので、同定を試みましたがそれが出来ませんでした。やっぱり、何かをもって帰るときは、もう少し周りの状況を観察しておくべきだと反省しています。このヤママユガの繭からとれる絹は「天蚕糸」と呼ばれ、それで作られた製品は高級な絹織物として珍重されるようです。

写真のものは、羽化した後のものであり、薄緑色は少し色あせて「緑のダイヤモンド」にはほど遠く、私の机の中にころがされています。

（シハイスミレ）

観察会のお知らせ

「スミレと早春の花観察会」

日時　3月24日（土）午後1時30分～午後3時30分

場所　高知市鏡ダム周辺

午後1時30分に、高知市鏡（旧鏡村川口）の川口橋北詰集合

講師　細川公子さん（連絡会幹事　土佐植物研究会）

（オカスミレ）

****

定例総会について

定例総会については３月下旬に開催する予定で準備をしています。開催日時が決まりましたらニュースレターでお知らせしますで、ご出席ください。
例年、総会にあわせて講演会を開催していますが、講演のテーマについての要望や提案がありましたら事務局までお知らせください。
講師への謝金については些少ですが予算を確保してあります。

****

会費納入のお願い

２００６年度の会費を未納の方は納入をお願いいたします。

納入方法は郵便振替が安価で便利ですので、郵便局備え付けの振替用紙を利用して、振込みをお願いします。

郵便振替の**振込口座番号は　01630-9-41422**

加入者名は　　**高知県自然観察指導員連絡会**　　です。

「ネイチャー高知」の原稿を募集します。「ネイチャー高知」は、高知県自然観察指導員連絡会の機関紙として、１月、７月の年２回発行しています。自然保護に関する主張やエッセイ、フィールドの紹介など何でも結構ですので、どしどし投稿ください。

「ネイチャー高知」高知県自然観察指導員連絡会会報

NO　28

事務局　780-8075　　高知市朝倉南町３-51-1　坂本彰　方

TEL＆FAX　088-850-0102

E-Mail　akira@baobab.or.jp